

前回は、ものの値打ちが、そのものの自体ではなく、それにまつわる「**伝説**」によって高騰することがある、というお話をしました。そして、ストラディヴァリのバイオリンが途方もない高額で取引されるのは、その「伝説」によるのではないかと。

楽器の値打ち

其の二

「所謂（いわゆる）
書画骨董という
煩惱の世界では、
ニセ物は人間の
様に歩いている。
煩惱がそれを要
求しているから
である」

（『真贋』 小林秀雄）

誤解を恐れずに言えば、ストラディヴァリのバイオリンが高額なのは、音が良いからではありません。その高額な価格の根拠となるのは、そのバイオリンをストラディヴァリという**伝説の名工**が製作したという事実です。

いえ、「事実」というのも本当は正しくありません。実際には、『ストラディヴァリが製作したと思われる』と、権威ある人々によって鑑定されている」とでも言えば、より正確かもしれませんが。（そもそも数百年も前に作られたものを、100%間違いなく正真正銘の「ほんもの」として証明するのは、不可能に近い話です。楽器が製作されるところから現在に至るまで、ずっと誰かが見張ってでもない限りは）



それはさておき、このようにイタリアン・オールド・バイオリンの売買に於いて問題にされるのは、楽器の**故事来歴**であり、楽器の音ではありません。

つまり、イタリアン・オールド・バイオリンの取引の世界は、もはや骨董の世界と言って差し支えないでしょう。そして、骨董の世界に、にせものはつきものです。

では「**にせもの**」とは何か？

世の中には、ストラディヴァリウスのコピー楽器はごまんとあります。

コピーをコピーとして売れば、それは「ほんもの」です。しかしコピーをストラディヴァリの作った楽器として売れば、「にせもの」を売ったことになります。

残念ながら「にせもの」と知りつつ、安価な楽器を名器と称して不当な高値で売る業者がいるのも事実です。

こうした「にせもの」の名器に大枚をはたいて、「ほんもの」と信じ込んでいた人が、何かの機会に、これが「にせもの」だと気づいたとします。そして自分の楽器にすっかり嫌気がさし、知人にこれが「にせもの」であると明かして、二束三文で売ったとします。

すると、「にせもの」を「にせもの」としての適正な価格で買い、「にせもの」と承知して弾く新たな所有者のもとで、この楽器は「**ほんもの**」になったとは言えないでしょうか。（もちろん「ほんもの」の名器になったと言うことではなく、「ほんもの」の安物の楽器になったという意味ですが）

これは、単に売買の時だけの問題ではありません。

たとえば、旧家の蔵の奥に古いバイオリンを見つけたとします。見ると、どうやらラベルにイタリアの名工の名がある。

しめた！ **大変な宝**を掘り当てたと、このバイオリンを高価なイタリアン・オールド・バイオリンと信じ込んだとします。

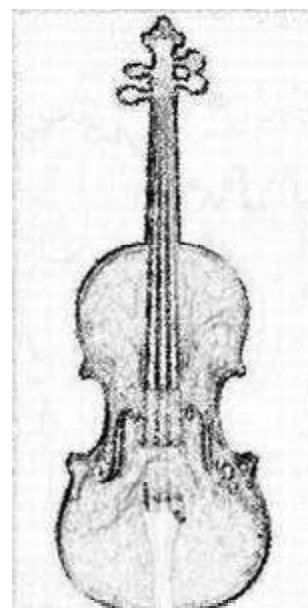
弾いてみるとさすがに良い音ができる、楽器の作りも美しい。ありがたや、ご先祖様はこんな名器を残してくれていたのだ
・ ・ 。

後日この楽器を「ナントカ鑑定団」に出したところ、あっさりと、1900年代前半にフランスで作られた量産品の楽器と判明します。

なんだ、がっかり。「にせもの」だった。とたんに、楽器の音も見かけも**みすぼらしく**思えてくる。

でも、楽器にとっては良い迷惑でしょう。なまじ「ほんもの」と信じ込まれたばかりに、あとで「にせもの」呼ばわりされるとは、楽器にとってはいい面の皮です。

つまり、楽器という「もの」には何の罪もない、ただもっぱら**人間の側の思惑**が「にせもの」を作り出すと言えるでしょう。



私がこの仕事についたばかりの頃に、主にイタリアのオールドバイオリンを中心に商売をされている、ある大きな弦楽器店の社長さんに、この仕事は**夢を売る**仕事だよ、といわれたのを覚えています。

そのときは、音楽に関わる夢のある仕事、という程度に考えていたのですが、今にして思えば、かなり複雑な意味を孕んでいたようなことばにも思えます。

音楽の道具としての楽器を売るのではない。売るのは、その楽器の持っている歴史やそこから派生する夢とロマンだ。そして夢である以上、それは**いつか覚める**かもしれない・・・。

そこまで言うと言い過ぎと思われるかもしれませんが、イタリアン・オールド・バイオリンの取引を巡る現状を垣間見るにつけ、あながち私の思い過ごしとは言えないのではないのでしょうか。

楽器の値打ちというものを考察していたら、いつの間にか骨董の世界に迷い込んでしまいました。

残念ながら、ここでは楽器にとって本来主役であるはずの**音楽は置き去り**にされているように思います。

それに、にせものが「人間の様に歩いている」ような世界は、なんだかぞっとしませんから、ここらで退散することにしましょう。

怒る？

マエストロ

クレモナ留学記～怒られる(?)編～

金曜日の夕方、工房までの道。自転車のペダルがいつもより重い。今日こそはついに怒られる・・・そう思ってた。今週中に表板と裏板の 接ぎ合わせ* を終わらせたくて、残っていた裏板に集中するために朝から家でひとり、カンナがけを始めて **8時間**。まだ終わっていなかった。時計は夕方の5時。もう出かけなきゃ、約束通り今日中に接着出来ない。でもまだ準備ができてない。

おそろおそろマエストロに電話すると、

「まだ木はある？持っておいで。」

(あまり削りすぎると当然木は足りなくなるので)

*) ヴァイオリンの表板と裏板は通常それぞれ2枚の板を真ん中で接ぎ合わせて1枚の広い板にしてから使います。



左) 2枚の細い板。この真ん中をカンナで削ってピッタリ合わせる。
中左) ニカワをつけて万力でしっかり挟んで接着。中右) 1枚の広い板になる。右) ヴァイオリンの型に合わせて切る。

「ボ、ボナセーラ（こんばんは）」

「あ～チャオ（やあ）！ 一つ言い忘れてた。学校でも言われたかもしれないけど、接ぎ合わせに1時間かかるようならもう**放っておけ**。今日はその日じゃなかったんだということにして、他のことをやった方がいい。」

そう言いながら私の裏板を作業台に固定して、マエストロの大きなカンナで3回、スー スー スー。

「OK。にかわを用意して。」

怒られなかった。それにしてもその仕事の速さと確かさに呆然。そっか、朝から始めたカンナがけ。お昼を過ぎたころから私の集中力はとっくに切れていたんだ。

いい材料に時間と手間をかけて、一つの楽器を丁寧に作る。でもだらだらと一つの作業を際限なく続けては疲れるだけで良くない。もちろん、木を刃物で削っていく楽器作りに材料の際限はあるのだけど。疲れをためるよりは、次のこと他のことに進んだ方がいい。これはヨーロッパ人の合理的考えとも言えるのでしょうか。怒ることにも時間をかけなかったマエストロに感謝。

Primo Pistoni(プリモ ピストーニ)

：現代イタリアを代表するバイオリン製作家の一人。

日々、より良い楽器を追求し続けている。

最近朝食に日本の緑茶がお気に入り。



DALLA BOTTEGA

前回に引き続き、楽器の価値とは何かについて考えてみました。イタリアン・オールド・バイオリンを巡ってはかなり際どい話も致しました。

誤解して頂きたいのは、バイオリンに関するすべての取引がいかかわしいものだという印象を受けられたとしたら、それは本意ではありません。

ほとんどの取引は正当に行われています。

ただ、残念ながら一部、そうではない取引があるのも事実です。一台の楽器に、たとえば数千万円を支払うというのであれば、その楽器が音が良いだけでなく、間違いなく「ほんもの」でなければいけません。

数千万円という金額は、音に対するものではなく、「ほんもの」であるということに対するものなのですから。

考えるほどに、厄介な世界ですね。

もともと、私にとっても、そして恐らく多くの方々にとっても、いささか現実離れした金額の話ですから、それはそれで、かえって悩みが無くてありがたいことかもしれません。

もちろん、もっと値段の安い楽器でも、にせものであって良いはずがありません。

皆さんに「ほんもの」を提供するように、日々努力していきたいと思えます。

「客よし、店よし、世間よし」近江商人の経営哲学だそうです。肝に銘じたい言葉です。